



一日の友

「あの、そこのお方」

いきなり声が聞こえてきたので、ねずみは思わずびっくりして、瞑っていた目を開けると同時に飛び上がってしまった。動物の気配など全く感じていなかった。感じていなかったからこそ、この危険と隣り合わせの大自然のなかで、こうして両目を閉じて寛ぐなどという隙だらけの行動をとることができたのだ。

しかし、声は今しがた自分のすぐ後ろの方、しかも上方から聞こえてきた。控えめではあったけれど、地に響くような厳かな声だった。なんだか嫌な予感がして、ねずみは後ろを振り向くのを一瞬躊躇ったが、このままずっと謎の存在に背を向けたままにいる訳にもいかないの、意を決して恐る恐る背後を振り返った。

そしてまたもやねずみは飛び上がった。今度は悲鳴つきだった。自分のすぐ背後に佇んでいたのは、威厳ある一頭のライオンだったのだ。

ねずみにはもはや何かを考えている余裕はなかった。条件反射で身体は勝手に、恐怖にすくんで縮こまっているよりも逃げ出すことを選択していた。

「あ、待って」という声が背後からしたような気がしなくもなかったが、待ってられる訳がなかった。ねずみはまだ若かった。つい先日ようやく一人前の大人になって巣立ったばかりなのだ。まだまだ死ぬには早すぎる、と思う。

まだ生まれ育った巣の外の世界を堪能しきっていないし、巣から遠く離れた地に出発できてもない。その上子孫を残すためにつがいを見つけてすらいない。できていないことが多すぎる。自分は若すぎる。

やはりこんなところで死ぬわけにはいかない。ぱくりとやられて呆気なく死ぬようなのは嫌だ。

どうせ同じ死ぬなら、巣にいる家族を守るために勇敢に戦って死にたいというものだ。小さなねずみにとっては広すぎる大地の上を、ねずみは心臓をばくばくいわせながら懸命に走った。

しかし悲しいかな、身体の大きさからして、圧倒的にねずみには不利な状況にあった。

ねずみが一生懸命に走った距離を、ライオンはわずか一度の跳躍で飛び越え、一瞬の後にはねずみの前に立ちはだかっていた。ねずみは悲鳴をあげながら急ブレーキをかけ、狂ったように今度は反対方向へ逃げようと図った。だがそれは叶わぬ夢だった。いきなり背中に強い圧力を感じたかと思うと、身体が自由が利かなくなっていたのだ。

一体何が起こったのか分からずねずみはパニックになりかけた。しかも圧力は小さなねずみにとってはかなり強いものだった。

「いいい痛い痛い痛い痛い！」

「あっ、す、すみません。どうも力の加減が分からなくて」

そんな慌てふためいた声が自分の頭上から聞こえてきたかと思うと、圧力が少し弱くなり、身体に走る痛みも和らいだ。その追加効果で、ねずみのパニックも若干ではあるが和らいだ。やっとともに呼吸ができるようになり、ねずみは依然として動けない状態のまま、むさぼるように空気を吸い込んだ。

ある程度深呼吸して呼吸が正常に戻ると、思考回路も徐々に正常に戻ってきた。そうすると、

危機的状況のなか少しではあるが考える余裕が出てくる。

力の加減？ 声は確かにそういった気がする。力ってどの力だ。誰が加減するんだ。そもそも、加減ってどういうことだ。

一、二秒の後、自分の置かれている状況を悟ったねずみは、さあっと一気に青ざめた。

つまり、自分は、今、さっきのライオンの、下に、いる……。

……！

「きいやあ——っ！ 食べないで食べないで食べないで食べないで——！」

「ど、どうか落ち着いてください」

「落ち着けるか——っ！ まだ死にたくないよ生きたいよ食べないでお願い見逃してくださいお願いしますどうかどうか！」

ねずみはじたばたとそれこそ死に物狂いで暴れた。が、ちっぽけな一匹のねずみがライオンに敵うはずもなく。いくら暴れたところで再び自由の身になれる可能性はなきに等しいのであった。

「どうか落ち着いてください！ 僕は貴方を食べたりなんかしませんしあなたに危害を加えるような真似は一切しません！」

「じゃあ今この状態はなんだってんだ！」

「これは、貴方が逃げようとするから！」

「誰だってライオン見たら逃げるわドアホ——！ ああすみませんすみませんドアホなんて嘘ですごめんなさい許してそして助けてください——っ！」

ライオンは自分の足元で必死に逃げようとしている小さな生き物を困惑して見ているうちに、段々申し訳ない気持ちが強まってきた。自分がこうして軽く押さえつけているだけで、いや、自分を目にしただけで、この哀れな生き物は死の恐怖を感じてこうして必死になっているのだ。自分が今ここにこうして存在するだけで、この生き物を苦しめてしまっている。自分は今すぐこのねずみを自由の身にしてやるべきなのかもしれない。

しかしライオンには、どうしても叶えたい望みがあった。だから、疼く良心を黙らせながらもライオンは決して足をあげてねずみを自由にしてやろうとはしなかった。

ひとまずねずみを落ち着かせて話を聞いてもらうのが先決だ。そのためにも、可哀想だがこうしてひとしきり暴れてもらって疲れてもらうしかない。過労死などしなければいいのだが。いやそれはまた別の問題か。とねずみとは打って変わってライオンはひとり落ち着いて構えていた。

数十分程暴れると、ねずみはもうすっかり疲れきってしまって、これ以上暴れることができなくなった。しかし暴れることができなくなったからといって、死の恐怖を拭いさることができず、ただただ疲れきった身体を震わせて、自分のこれからの運命が最悪の結果へと着実に近づいていくであろうことを予想していることしかできなかった。

「落ち着きましたか？」

頭上から声が降ってきた。低く、ゆったりとした声だった。今しがた聞こえてきた声の調子からは、今すぐ自分を食べようという意志は感じられなかったが、こうして囚われの身となっている以上いつその時が来てもおかしくない。ねずみは思わず身体を硬くして、来るべき時に備えて身構えた。

「怖がらせてしまってすみません」

頭上の声は続けた。

「でも私は本当に貴方を食べるつもりも危害を加えるつもりも全くないのです。どうか信じてください」

そうは言っても、今こうして上から押さえつけられている状態では信じることなど難しい。それに、一体どこの世界にこうして暴れる獲物を長時間捕らえておいて、命を奪わないライオンがいるというのか。

何故かは分からないが年々環境が変化してゆくなか、植物も草食動物もどんどん減少していつている。ライオンたち肉食獣の餌は十分にあるとはいえないはずなのだ。せっかく捕らえた獲物を食べもせずにもすみすみ見逃すはずなどない。不本意ではあったが、今ねずみにできるのは、あの世に出かける心の準備をすることだけだった。

「……私の言葉を全く信じてくださらないようですね。まあ、仕方ないですが」

そういつてねずみを押さえつけている存在は、はあとため息をひとつついた。小さなねずみには一陣の風が地上に向かって吹き付けてきたかのように感じられた。

「貴方は私をほんの一瞬しか見ていないから、ライオンだと思ったのでしょうか。信じてもらうためには、ちゃんと私の姿を真正面から見てもらいたいものですが……この足をどけたら、貴方は私の話を聞きもせずにも一目散に逃げていってしまいそうですし……」

絶望のあまり危うく聞き逃すところだったが、生存本能がちゃんと働いて自分にとって必要と思われる言葉を拾った。そして小さな脳みそがフル回転して脱出作戦を練り始める。もしかしたら、助かるかもしれない。ねずみには一筋の希望の光が見えたような気がした。

「いえいえ、逃げませんよ。あなたを信じましょう。逃げませんからどうか、あなたの姿を一目拝見させてくださいな」

わずかな可能性も取り逃すまいとねずみは早口でまくしたてた。

大いなる存在は、大人しくなってから今まで口をつぐんでいた小さき者が、突然言葉をつむいだので不意をつかれて驚いたようだった。が、ねずみの言葉の意味を理解すると、嬉しそうな声で言った。

「私を信じてくださるのですか」

疑うということを知らない純粋な声は弾んでいた。

ねずみは可能性がますます大きくなるのを感じたので、こちらも声が少々弾んだ。

「ええ、ええ、信じますとも。相手をはなから疑ってかかるのは悪いことでした。反省しています。聞いたところ、あなたの声はとても純粋だ。あなたのようなお方が嘘をつくとは到底思えません。ですから僕はあなたを信じることにしました。あなたはさっき、自分はライオンではな

いというようなことを言いましたね？ それはどういう意味なのですか？」

「ああ、嬉しい。私の話を聞いてくださるのですね。ありがとう、ありがとう」

低い声が、それはそれは嬉しそうな調子を含んで言った。

「貴方の言った通り、私は恐らくライオンではないのです。形はライオンそのものですが、まず他のライオンのように肉食をしないのです。そして、身体の色が一般のライオンとは違って、全身緑色をしているのです」

弾んだ声がそういったのを聞いて、ねずみは、おや、と思った。この声が言っていることは何だかおかしいのではないか。自分は先刻確かにライオンを見た。そして今こうしてライオンに押しえつけられているはずだ。なのに、ライオンの話を聞く限りでは、今自分の上にいるのは肉食のライオンではないというではないか。一体これはどういうことだ。

肉食でないライオンなど今まで見たことも聞いたこともないし、全身緑色をしたライオンというのもまた然り。今頭上にいる存在が肉食でないという話が本当なら、それはそれはありがたいことだけれども、そんなことはありえない、とねずみは思った。

「肉食ではないというなら、一体あなたは何を食べて生きているのですか」

ねずみは気になって問うてみた。すると、頭上の存在はよくぞ聞いてくれた、とでもいうように嬉しそうに喉を鳴らした。

「私には食事など必要ないのです。生きていくために私に必要なのは、水と太陽の光、そしてこの大地だけ。まるで植物のようでしょう」

そう言って彼はからからと笑った。「ですから私は、“草ライオン”と名乗っているのです」

草ライオンだって。それこそ見聞きしたことがない存在だ。本当にそんな生き物が存在するというのだろうか。

今やねずみのなかには生存本能と同じくらい強く好奇心が作用していた。生存本能は、なんとか隙をみつけてこのどでかい足から一目散に逃げろとねずみに訴えかけていたが、好奇心の方は、いや危険はないのだから、逃げるよりもこの存在の正体を確かめるべきだと囁いていた。両者の勢力はほぼ同等で、なかなか決着がつかない。しかし徐々に徐々に好奇心が生存本能を圧倒していつているのを、ねずみは感じていた。

とうとう生存本能が好奇心に対して降伏し、白旗を掲げた。

「あの……よろしければお姿を拝見してもよろしいですか？」

そう尋ねると、自称草ライオンはもちろん、と言って少しの躊躇いもなしに足を上げた。

いざとなったら逃げ出そうと自分のなかで再確認してから、ねずみは立ち上がってすっかり硬くなってしまった身体を簡単にほぐし、腹についた土を払い落としもせずさっと後ろを振り向いた。

そして、固まった。思考も身体も。

ねずみの目の前には、本当に全身緑色の生き物が存在していた。試しに両目を擦ってみたが、ライオンの身体は緑色のままだった。ねずみは頬をつねってみたけれど、やっぱり前の緑が茶色に変わるはずもなく。これは現実だということをねずみに容赦なくつきつけていた。

緑の生き物は、黒曜石のような瞳に穏やかな光を携えて小さなねずみを見下ろしていた。軽く開いた口からのぞく歯は、今までどんな食物も口にすることがないともいうかのように、真っ白に輝いていた。たてがみの先端まで美しい深緑色は広がっており、何かで染色したような様子は見受けられなかった。

ねずみは逃げることも忘れて、ただただ目の前の神聖な存在にすっかり惹きこまれてしまっていた。神秘的な緑の獣からは、肉食獣の気配は一切感じられない。しかし草食獣の気配もまた感じない。どちらかという、植物に近い気配が感じられたが、定かではない。ただ、今まで出会ったどんな生き物とも違った存在なのだということしか、ねずみにははっきりといえることがなかった。

嘘は言っていない。

ねずみの直感がそう告げた。

この生き物は、嘘はひとつもついていない。本当に草ライオンなのだ。

「……どうやら私の言葉を今度こそ本当に信じてくれたようですね」

そして草ライオンはくすくすと笑う。

「さっきは口先だけで、本当は逃げようと画策していたみたいでしたけど」

どうやら先程の自分の計画はすっかりお見通しだったようだ。ねずみはなんだか急に恥ずかしくなって無言で俯く。するとライオンは慌てたように付け足した。

「ああ、いいですよ。どうか気にしないで。誰だって、いきなり言われてもはいそうですかと簡単に信じられやしませんよ。あなたのような反応が正しいんです」

それでもねずみは何故だか無性に申し訳ない気持ちになって、お詫びに何か自分にできることならライオンのためにしてあげたいと思った。ほんの数秒前までは、このライオンから逃れようと画策していたというのに、今ではライオンに対して自分の行為を申し訳ないと思っているのだから不思議な話だ。ねずみはライオンに好意を持ち始めている自分に気がついていた。

「あの、ひとつお願いがあるのです」

何かしてあげたいと思っていた丁度そのとき、ライオンからのこの言葉。自分から申し出るのは気がひけていたねずみにとっては、ありがたい展開だった。

「願って何ですか？」

僕にできることなら何でも。言葉にはしなかったものの、そういう真剣な気持ちをこめてねずみは尋ねた。

草ライオンはすぐには答えなかった。

何故か言うのを躊躇っているようで、何度か口を開きかけては思い直したようにつぐむというのを繰り返す。ねずみは気の長い性質だったので、別段相手が続きを言うのを待つことになんら苦を感じなかったが、これが短気な者であったら、たちまち気を悪くして立ち去ってしまってい

たであろうと予想されるくらい、ライオンは言葉を紡ぐのを渋っていた。

そうやって待っている間に、ねずみはねずみで考えていた。

きっとこの草ライオンが自分を捕らえていたのは、その内容はまだ分からないけれど願いを叶えてもらうためだったのだろう。しかし一体全体その願いとは何だろう。体格の大きな、立派な草ライオンにさえできないことが、こんなちっぽけな自分に果たしてできるのだろうか。いや、逆に考えて、身体の小さな者にしか、ちっぽけな存在の者にしかできないことをライオンは頼もうとしているのかもしれない。しかしいくら推測したところで、やはり直接内容を聞くより確かなことはない。結局ねずみは願い事の内容を憶測するのを途中で放棄し、それが自ずと明らかになる時を待つことにした。

ねずみが予測するのを止めたとほぼ同時に、草ライオンは漸く決意できたのか、口を開いた。「そもそも、この願いを叶えてもらうために私は貴方を留めていたのですが、聞いてくれますか？」

「こんなちっぽけな僕にできることなら、もちろん」

ねずみの言葉を聞いて、ライオンは安心したらしかった。笑顔になって言葉が自然と口をついて出てくる。

「むしろ貴方にしかできない、貴方にしか頼めないことなんです。どうか、今日一日、僕と一緒に過ごしてほしいのです」

そんな出会いがあってから既に半日以上が経った。ねずみは草ライオンの頼みを快く引き受け、彼と共に、特に何をするでもなくのんびりと時を過ごしていた。最初出会ったときの恐怖は、嘘みたいに消え去っていた。ただ今のねずみの内にあるのは、宇宙のように静かで穏やかな気持ちだけだった。

時々、ふたりは会話を交わした。しかしそれは本当に時々であって、大方は両者とも口をつぐんでただぼうっと辺りの景色を何も考えずに眺めているだけだった。

草木はまばらにしか生えておらず、背の高い木々はとうの昔に枯れてしまったこの荒れ果てた自然界。その殺風景な景色をただぼんやりと眺めているのは、毎日毎日していることではあったが、不思議と今のねずみの心は満ち足りていた。

こんなに満ち足りた時を過ごしたことはなかった、とねずみは心の内で思う。一体何故、自分はこんなに充足しているのだろうか？ 答えは自問するまでもない。草ライオンが傍にいるからだ。この大いなる存在が傍にいるからこそ、自分は今こうして落ち着いた穏やかなときを過ごすことができているのだ。ねずみはそのことをちゃんと理解していた。

ふたりの間に流れる長い沈黙を、ねずみも草ライオンも、苦に思うことは全くなかった。むしろ、心地よいものとさえ思っていた。互いの存在を感じながらも別に話すことがなければ無理に口を開くこともなく、時折うつらうつらしながらも傍にいる。これはとても素晴らしいことのようにねずみには思っていた。事実、それは素晴らしい体験であったのだ。

「そういえば」ねずみは不意に不思議に思ったことがあって口を開いた。隣を向けば、短木に寄りかかっていた草ライオンが、丁度浅い眠りから覚めたところであったようで、ふわあと大きな欠伸をしている最中であつた。

「これは失礼」草ライオンはゆったりと笑いながら言った。「なんでしょう」

「あなたは確か、こうしてあなたの傍にいるという頼みは、僕にしか頼めないと言いましたね」

「ええ、言いましたよ」

それがどうかしたのかとでもいうように、きよとんとした表情で草ライオンはねずみの小さな顔を見つめた。

「どうして僕にしか頼めないのですか？ 僕にはどうも、他にもっと適役がいるように思えて仕方がないのですが……」

最後は消え入りそうな声になってしまったが、言いたかったことはちゃんと言えた。ねずみは先程からこのことを考えていたのだった。

確かに今では、こうしてこの穏やかな気持ちを分け与えてくれているに違いない草ライオンと共に時を過ごせるのは、光栄なことだと分かっていた。自分がこの役に選ばれたことを偉大なる自然の神に感謝しているくらいだった。

しかし感謝すると同時に、ねずみはどうしても理解できなかつた。

自分はねずみというちっぽけな存在だ。ねずみのなかでも、まだまだ半人前にすら至っていない状態である。そんな自分を、草ライオンは求めてくれた。

これは一体どうしてなのか。

自分には別段、他の動物より優れているところがある訳ではなし。共にいていいことがある訳でもなし。一体、草ライオンは自分のなかに何を見出してくれたのか。

草ライオンは暫くじっとねずみの小さな瞳を見つめていた。ねずみはライオンの大きな瞳を見つめ返した。大きな瞳のなかから、ちっぽけなちっぽけなねずみがこちらを更に見つめ返して来た。

「同じ、だからです」

草ライオンがぼつりと呟いた。その呟きがあまりに唐突だったので、ねずみは鸚鵡返しに彼の言葉を繰り返すことすら出来なかつた。

「貴方と私は同じだと、直感が私にそう告げたのです」

どこがどう同じだというのだろう。ねずみにはとても自分と草ライオンが同じだとは思えなかつた。どこも似ているところなどない、と思う。草ライオンは偉大で立派なのだろうと思うが、自分は本当にどうしようもなく惨めな存在だ。動物全体のなかでも嘲られる種族である上に、ねずみ仲間からも重んじてもらえない。

別に、苛められる、という訳ではない。疎まれてる訳でもない。しかし、積極的な好意を寄せられている訳でももちろんない。

自分は空気なのだ、とねずみは時折感じていた。仲間のなかで、自分は空気なのだ。いてもいなくても同じ。声を出せば、ああ、いたの、とどうでもいいというような声をかけられて、それ

で終わり。誰も自分を見てくれない。ねずみは切なかった。

そんなどうでもいい存在である自分。とてもとても、この偉大なる草ライオンと自分が同じだとは思えない。しかし、ライオンは自説を裏付けるかのように微笑んだ。

「同じなのですよ。貴方は信じられないみたいですけど。誰も自分を見てくれない。誰も自分の想いに気づいてくれない。自分は空気なのだ。自分は独りなのだ。皆にとって、自分はいてもいなくても別段なにも変わらない、どうでもいい存在。それなら、自分はいっそいない方がいいのではないか。いっそのこと消えてしまった方が、ずっといいのではないか。でも、やっぱりそんなのは悲しすぎる。自分も誰かに認められたい。ちゃんとここに存在しているということを感じてもらいたい」

ねずみは目を真ん丸く見開いて、草ライオンの言葉を大人しく聞いていた。彼はそんなねずみを優しくいたわるかのように微笑みながら続けた。

「誰かに愛されたい。誰かを愛したい。傍にいたい。自分のことを考えてほしい。誰かのことを考えていたい。自分を一個の存在として、ちゃんと重んじてくれる誰か。自分を大切な存在として、心からの笑顔と言葉を向けてくれる誰か。自分のこの孤独の氷を、溶かしてくれる誰か。そんな誰かに出会いたい。そんな誰かと共にいたい……。そんな風に、ずっと考えてきたのではないのですか？」

ライオンは問いかけ、そして口を閉じた。彼の瞳には、今にも壊れそうなか弱き者が映っていた。その身体は小刻みに震えていた。

ねずみはこくと素直に頷いた。両の目からは、ぽろぽろと澄んだ雫が零れ落ち始めた。

そう、そうなのだ。自分はずっと独りだった。誰も自分の本当の想いに気づいてくれなかった。

いつもいつも寂しかった。

傍には誰もいなかった。

互いに仲間と楽しげに笑いあっている者たちを見ると、いつも心が軋んだ音をたてた。

いつでもどこでも、突然目頭がじんわりと熱を帯びてくるのだった。

それでも誰も、自分を振り返ってはくれなかった。

それなりに努力はした。何か目立つようなことをしてみようと画策したり、大きな声で笑ったり、積極的に皆に話しかけにいたり。

しかし結局のところ、独りであることになんら変わりはなかった。何もしなかったときより、独りであることがより強く感じられるだけだった。

「私も、今言ったようなことをずっと感じてきたのです」

小さな嗚咽を漏らし始めたねずみを優しく見つめながら、草ライオンは静かに言った。

「私は草ライオンですが、両親は至って普通のライオンでした。私は、異端の者。誰も私を見ようとはしてくれませんでした。といっても、別に苛められてきた訳でも疎まれてきた訳でもありません。故意に無視されることもありませんでした。私の仲間は皆心根の優しい者たちばかりで、異端の者を差別するといったことはしなかったのです。しかし私はひとりだった。誰とも馬が

あわなかった。皆、そのうちに私を空気とみなすようになった。それも無意識のうちに。だから余計に私は悲しかった。誰かの傍にいたかった。誰かに傍にいてほしかった……」

ねずみは泣きじゃくりながらも、ちゃんと彼の話を聞いていた。だから途中から、彼がねずみにではなく自分に向かって話していることにも気がついた。

ねずみは口を挟もうとはしなかった。

ライオンは泣いていたのだ。

涙の代わりに言葉を流して、静かに、穏やかに泣いていたのだ。

「だから最後まで、誰かに傍にいてほしかったのです。そして辺りを探していたら、貴方がいた。私と同じ想いをしている存在が、いたのです。貴方なら私のこの苦しみを理解してくれると、直感で分かった。運命だと思いました。いきなり話しかけたりしてごめんなさい。驚いたでしょう。ですが、貴方はこうして私を受け入れてくれた。私の存在を真っ向から、全身で受け止めてくれた。こんなに嬉しい、こんなに幸せな想いをしたことはかつてありません。本当にありがとう、ありがとう。いくら感謝してもしきれないとはこのことです」

そんな。感謝したいのは自分の方だ。

ねずみはそう言いたかったけれど、涙と、胸につまっている想いが邪魔して結局何も言えなかった。

草ライオンは、穏やかにねずみを見つめていた。何か悟ったような穏やかさだった。

そう、悟ったような。

ねずみが泣き止むまでに暫く時間がかかった。ライオンはもうそれ以上何もいわず、再びふたりの間には沈黙が舞い降りた。聞こえるのはただねずみの小さな啜り泣きと、時々遠くのほうから聞こえてくる狼の遠吠え。そして、頭上の木の葉をゆする風の音。それだけだった。

ねずみが漸く落ち着きを取り戻した頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

夜の女王が続べる世界は真っ暗で、いつもなら心細いことこの上ない。

暗闇のなかでは孤独感は一層強くなるからだ。しかし今のねずみには、そういった類の心細さは全くなかった。だって傍には草ライオンがいるから。彼が傍にいてくれる限り、負の感情を抱くことは全くないだろうとさえ思われた。

しかし今、ねずみは不安だった。何かが起ころうとしているように思われてならなかった。具体的にどんなことが起ころうとしているのかは分からないが、それが、今自分の隣でゆったりとくつろいでいる草ライオンの身に起こるであろうということは第六感が告げていた。

そういえば、とねずみは思う。

そういえば、草ライオンは「今日一日」傍にいてくれと自分に頼んだのだった。

どうして今日一日、なのか。ずっと彼の傍にいてはいけないのか。それを考えると、ねずみの中の不安は更に大きくなった。

嫌だ、離れたくない。彼の傍にいたい。

漸くできた大切な友だちなのだ。たった一日で離れることになるなんて、つらすぎる。

一体どうして草ライオンは一日だなんて限定をつけたのだろう。どうせならずっとと言えばよかったものを。僕なら喜んで貴方の傍にいるのに。

そういえば、とまた思う。

そういえば、さっき草ライオンは「最後まで」と言っていたのだった。

どうして最後まで、なのか。最後とはどういう意味なのか。今日が最後なのか。何の？彼の？いやまさか。だって、彼はひどく若い。僕と同じでまだ成体になったばかりの、若々しい肉体を持っているじゃないか。

「……そろそろ、時間のようです」

不意に草ライオンが言葉を発したので、考え事に耽っていたねずみはひどく驚いてびくりと大きく身を震わせた。その様子を見て草ライオンは笑った。

「すみません。驚かせてしまいましたか」

「……驚きましたよ。いきなり、話すから」

そう言いながら、ねずみは今しがた草ライオンの言った言葉の意味が分からず、眉を顰める。

「時間って、どういうことですか」

「そのままの意味ですよ」とライオン。もう暗くてよくは見えないが、穏やかな笑顔を浮かべている気がする。「時が来たんです」

「何の時だっていうんですか？」

妙な焦燥感に駆られて、ねずみは半ば叫ぶように問うた。口にしてから、自分の声の大きさに驚く。反射的に口元に両の前足をやるが、今更その行動をとっても意味がない。

叫んだ当の本にんが驚いているのに対し、ライオンはいたって平然としていた。

「最初貴方に、私の傍にいてほしいと頼んだとき。私は、今日一日、と言ったのですが、覚えていますか？」

彼の声が妙に落ち着きすぎている、とねずみは思った。

「……覚えていますよ」

まさに今しがた自分が考えていたことだ。一体今、草ライオンはどんな表情を浮かべているのか。暗くてよく見えない。何故だろう。夜目はそれなりに利くはずなのに。

「ここは、この辺りは、妙に植物が少ないとは思いませんか？」

「は？」

唐突な質問の意図が分からず、思わず間抜けな声をあげてしまう。

しかし草ライオンはそんなねずみに構わず続けた。

「私は、この辺りの植物が少なすぎると思うんです。こんな状態じゃあ、草食動物はまともな食事を摂ることが出来ない。草食動物が減ってしまえば、肉食動物の数も減少してしまう。つまり、植物が少ないと、その地に生きるあらゆる動物たちの数も必然的に少なくなってしまうということです」

草ライオンが一体何を言わんとしているのか皆目見当がつかず、ねずみはただ黙っているしかなかった。草ライオンの顔は見えないのだが、彼の口調から、瞳に熱いなにかが燃えたぎっているのは確かに感じられた。熱い何か。そう、使命感、とでもいうような。

「この世に生まれ出でる者たちは全て、それぞれに何か役割を持って生まれてきます」

先程よりも少しばかり落ち着きを取り戻した声で、草ライオンは言った。

「私にも貴方にも、それぞれの使命があるのです。大抵の者は、この大地を踏みしめて生きていくうちに、自分の負った使命をすっかり忘れてしまうのですが、なかには私のように自分の使命

をきちんと覚えている者もちゃんといるので」

ねずみは生唾を飲み下した。嫌な予感というか、哀しい予感がすぐそこまで来ていて今まさに現実のものとなろうとしているのがひしひしと感じられた。「あなたの使命とは、何ですか？」

ライオンは笑った。快活な笑いだった。もう暗くて、ねずみには彼の姿さえ見えなくなっていた。そのことをおかしいと感じる余裕も、ねずみにはなかった。

「私は草ライオンです。生まれいでてから陽の光を一身に受け、エネルギーをこの身体のうちに溜めてきました。今漸く、この内に溜まったエネルギーを解放する時が来たのです」

訳が分からない。

ねずみは更に問い詰めようとした。しかし、何かが頬に触れ、一瞬気がそちらに向かった。何だ、今のは。

それは、短草だった。暗くても夜目の利くねずみにははっきりと見えていた。短草が、いつの間にか辺り一面にびっしりと生えている。

「ありがとう。最期に貴方に会えて、よかった」

擦れた低いその声は、突然生えてきた短草から聞こえてくるようだった。それでねずみは悟った。

「お願いします。どうか死なないで！ 僕を置いていかないでください！ 独りにしないで！」

擦れた声がまた笑い声を上げた。ねずみの逆立った毛を宥めるような、柔らかな笑い声だった。それを聞いて、ねずみは若干恐怖を拭い去ることができたが、それでもやはり怖かった。もう独りは嫌なのだ。自分を知ってくれる友のいる幸福を知った今となっては、なおさら。

「大丈夫」声は言った。

「これからはもう、貴方は独りではありませんよ……」

貴方は、これからは皆の中心になってゆくのです。それが、貴方に課せられた使命なのです。そして同時に、私の望みでもある。

どうか、諦めないで。今までの孤独は、決して無駄なことではなかった。これからは堂々と胸を張り、生きていきなさい。貴方はもう決して独りではない。貴方の傍にはいつも、光があることでしょう――

声はそう言って、消え去っていった。ねずみは急に生え出し成長を始めた草原のなかで、ひとり四つん這いの状態で植物から最後の最後まで言葉を聞き取ろうとしていた。もう声が、これ以上何かを言う気配は感じられなかった。突然生を受けた植物たちは、もう立派に地に根を下ろし、声の意志を継いですさまじいスピードで仲間を広げていく。

ねずみはぼろりと零れ落ちた涙を前足で拭い去った。そして、ぼつりぼつりと星の瞬く夜空を見上げ、きりりと眉を上げた。

「今度は、僕の番だ」

ねずみは自分自身に言い聞かせるかのように、力強い口調で独り呟いた。

彼の言葉に同意するかのように、足元で短草がさらさらと揺れた。

FIN